

株式会社オフィスビル総合研究所

本田広昭

都心のビルの建て替えが進んでいる。銀座のオフィスに勤めて30年、なんとその銀座で道に迷いそうになった。一瞬だったのかもしれないが、記憶喪失に陥ったような不思議な体験は、無意識のうちに目印として記憶されていた曲がり角のビルが解体されてなくなっていたためである。道に迷わないまでも、そのような体験をお持ちの方は少なくないはずだ。存在感があるとないとにかかわらず、建物がなくなるということは、私たちの心に刻まれた都市の記憶がひとつ消えるということなのである。

土地勘としての記憶なら、新しい建物で置き換えることができるかもしれないが、もしもその建物に自身の思い出が宿っていたならどうだろうか？ たとえば、人生の門出を祝福してくれた結婚式場。戦前戦後の工業立国を支えた財界人のご子息ご令嬢が挙式された日本工業倶楽部会館は、その多くの想いに支えられての保存と復元だったのではないだろうか。そして今も、あの美しい建物と美しいホールに新たな記憶が積み重ねられていく……。

建物に蓄積する多くの人々の記憶……しかし、実際に思い出が宿るのは人々の心の中であり、建物はその記憶を再生させる装置なのかもしれない。

もちろん、一枚の写真や一節のメロディも記憶を蘇らせる力はあるが、なんといっても、その再生装置が手の届くところにあるという事実、つまり本物が存在する意義がいかに尊いことなのか、そして、都市の記憶再生装置としての建築物は、そこに存在するという場所性がいかに重要であるかもお分かりいただけるはずだ。

しかし、都市部に残る、明治・大正・昭和初期のいわゆるニッポン近代化の建築遺産といえども、建物が稼ぎ出すキャッシュフローで不動産価値を計る時代に背を向けるわけにはいかない。しかしである、だからといって、人々の想いが一杯詰まった記憶再生装置の破壊と引き換えにするのは愚かだと認識すべきだ。なぜなら、その希少性と美しさ、そして我々の強い想いと知恵がそれを救ってくれるはずだからである。

赤レンガの東京駅を想う国民の情熱を受けて、石原東京都知事と当事のJR松田社長は都市計画法の改正を促し、その容積移転制度で蘇る。我々が、もっと知恵を絞らなければ、もっと身近な街に残る記憶再生装置の破壊は止められない。